

2022年1月24日発行

Contents

- 1) 学会からのお知らせ
- 2) 健康心理学コラム vol. 109 「犯罪行動と健康心理学」 野村 和孝 (早稲田大学)

1) 学会からのお知らせ (<https://kenkoshimi.jp/>)

■第126回/127回 健康心理学オンライン研修会のご案内(研修委員会より)

研修会は2月19日(土)から配信予定です。126回は、東京慈恵会医科大学の島崎崇史先生より「行動変容の健康心理学：心身の健康づくり行動の開始・継続・逆戻り予防を支援する」(仮)、127回は立命館大学の山野洋一先生より「禁煙支援・治療における健康心理学的なアセスメント法について禁煙支援に関する尺度と支援・治療場面の紹介」(仮)をご講演いただきます。

事前予約は、1月28日(金)より開始予定です(事前振り込み制)。学会ウェブサイト「研修会 (<https://kenkoshimi.jp/kensyu/kensyu2.html>)」からお手続きください。一般の方の参加も可能ですので、お知り合いの方へもぜひお声掛けください。

多数のご参加をお待ちしております。

■「日本健康心理学会第34回大会優秀発表賞」授賞の決定(第34回大会準備委員会より)

本賞は、本学会大会での一般研究発表の中で優れた発表に授与されるものです。

第34回大会優秀発表賞では若手奨励部門として3件、独創性部門として3件に対する授与が決定し、賞状が送付されました。受賞された発表の詳細につきましてはこちら(https://kenkoshimi.jp/pdf/list-excellentaward_34.pdf)をご覧ください。

2) 健康心理学コラム Vol. 109

「犯罪行動と健康心理学」

野村 和孝 (早稲田大学)

近年の犯罪行動抑止の取り組みは、犯罪行動が生起する状況避けることに主眼をおいたリラプス・プリベンションモデルを軸に、リスクとなる心理社会的要因に焦点を当てた研究が行われています。たとえば、犯罪行動に直接的に関連するターゲット(性的な興味等)に焦点化した心理学的プログラムの効果性が高いことが示された一方で、一般に有効だと考えられている被害者共感性を高めるアプローチの効果性の高さは確認できず、逆効果になることさえあることが課題とされています(たとえば、野村, 2017; 嶋田・野村, 2018)。また、近年の新たな展開として、犯罪行動のない「良い生活(グッド・ライブズ・モデル)」を送ることをねらいとした保護要因に焦点を当てた研究が展開されています。このような保護要因に関する研究では、リスクとなる心理社会的要因に保護要因を加えることで再犯の説明率が高まるとする知見がある一方で、心理学的プログラムの実践においては効果性が高まるとする知見は確認されていません(たとえば、野村, 2017)。ス

テレオタイプなイメージが先行しやすい研究領域であり、真摯にデータに向き合い取り組んでいくことが重要であると感じています。個人的には、健康心理学とも関連の深い保護要因に関する研究は、実践方法の精緻化等のさらなる発展を期待しています。

引用文献

野村 和孝 (2017). 再犯防止を目的とした認知行動療法の現状と課題—健康心理学によるエンパワメントの果たす役割—, *Journal of Health Psychology Research*, 29, 95-102.

嶋田 洋徳・野村 和孝 (2018). 性犯罪へのCBT, *臨床心理学*, 18, 73-76.

日本健康心理学会広報委員会

<http://jahp-public.blogspot.jp/>

メールマガジンの配信停止、アドレス変更は下記アドレスまで

日本健康心理学会事務局 < jahp@pac.ne.jp >

メールマガジンへのご意見・ご感想は下記アドレスまで

広報委員会 < jahp@pac.ne.jp >

過去のメールマガジンは、こちらからご覧いただけます

<https://kenkoshimi.jp/health/health1.html#mailmaglist>